



大官大寺の縄文土器

だいかんだいじ
大官大寺は、藤原京の時代に国がつくった大寺院です。文武天皇のころに工事が進められたものの、完成する前に火災で焼けてしまいました。巨大な金堂と塔の跡が明日香村小山の田園の中に残っており、1974年から奈良文化財研究所が発掘調査しました。ここに掲載したのは、1977年の発掘調査でみつかった縄文土器です。この土器は、いまから4,000年くらい前（縄文時代中期末から後期初頭）につくられたものです。

なぜ縄文土器がお寺からみつかるのか、不思議に思われるかもしれません。でも答えは簡単。飛鳥時代にお寺をつくった場所は、それよりずっと前、大昔に縄文人が生活していたところだったのです。後世にお寺の境内となる場所に、縄文人がたまたま土器を捨てていた、というわけです。

発掘調査では、地面を掘っただけの穴の中から、縄文土器の破片がたくさん出土しました。それを整理して、つなぎ合わせたところ、いくつかはもとの姿がよくわかるように復元できました。深い鉢のかたちをしている土器は、火にかけて煮炊きをしたり、食べ物や水をためるのに使ったのでしょう。表面には縄を転がしたり、線で文様を描いたりして飾っています。

まさかお寺の発掘で縄文土器が出てくるとは。地面の下にどんな歴史が埋まっているか、発掘してみないとわからないものですね。

(飛鳥資料館 石橋 茂登)

※これらの縄文土器は、飛鳥資料館の冬期企画展「飛鳥の考古学2014—縄文・弥生・古墳から飛鳥へ—」(2015年1月16日(金)～3月1日(日))で展示いたします。この機会に、ぜひ実物をご覧ください！